

令和4年度(2022年度)

病害虫発生予察情報

第1号

長期予報

北海道病害虫防除所 令和4年(2022年)3月29日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

札幌管区气象台発表の2月25日付の暖候期予報および3月25日付の3か月予報は以下のとおりです。

北海道地方3か月・暖候期予報

(4月から8月までの天候見通し)

暖候期 令和4年2月25日

3か月 令和4年3月25日

札幌管区气象台発表

<気温の各階級の確率(%)>

4月	20	30	50
5月	20	40	40
6月	20	40	40
6~8月	20	30	50

■低い

□平年並

■高い

<降水量の各階級の確率(%)>

4月	40	30	30
5月	30	40	30
6月	30	40	30
6~8月	30	40	30

■少ない

□平年並

■多い

春(4月) : 北海道日本海側・オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。

(5月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

夏(6月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

(6月から8月) : 夏の気温は平年より高く降水量は、ほぼ平年並の見込みです。この期間の平均気温は高い確率が50%、降水量は平年より少ないまたは多い確率が30%平年並の確率が40%です。

令和4年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎: やや多～多、□: 並、△: やや少～少を示す

注2) 近年の発生状況の()は、平年値がなかったため暫定的な評価

注3) あぶらな科野菜における近年の発生状況はキャベツでの発生量

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		H29	30	R1	2	3	発生期	発生量
水稲	いもち病(葉)	△	△	△	△	△	並	やや少
	いもち病(穂)	△	△	△	△	△	並	やや少
	紋枯病	◎	□	△	◎	△	やや早	やや多
	縞葉枯病	□	□	□	□	□	—	やや多
	ばか苗病	□	□	□	□	□	—	並
	苗立枯病	□	□	□	□	□	—	やや少
	種子伝染性細菌病	△	△	△	△	△	—	少
	ニカメイガ	△	△	△	△	△	早	少
	ヒメトビウンカ	◎	□	◎	□	△	やや早	やや多
	イネドロオウムシ	△	△	△	△	△	早	少
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	△	△	◎	△	□	早	やや多
	イネギワバエ	□	◎	◎	□	△	やや早	やや少
	フタオビコヤガ	△	△	△	△	△	早	少
秋まき小麦	赤さび病	△	◎	◎	◎	◎	早	多
	うどんこ病	△	△	△	△	□	早	並
	眼紋病	△	△	△	△	△	—	少
	赤かび病	△	◎	△	△	△	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	□	◎	△	□	△	—	並
	ムギキモグリバエ	△	△	◎	□	◎	早	多
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	◎	◎	△	△	△	—	並
	ムギキモグリバエ	△	△	△	△	△	早	並
大豆	べと病	□	△	△	△	△	並	やや少
	わい化病	□	□	□	□	△	—	並
	マメシンクイガ	□	△	△	△	△	並	少
	食葉性鱗翅目幼虫	△	△	△	□	△	早	やや少
	タネバエ	△	△	△	□	□	—	並
小豆	菌核病	□	△	△	△	△	並	やや少
	灰色かび病	◎	□	△	△	△	並	やや少
	茎疫病	△	□	△	△	△	—	並
	食葉性鱗翅目幼虫	□	□	△	△	△	早	やや少
菜豆	菌核病	□	△	□	□	△	並	やや少
	灰色かび病	△	△	△	□	△	並	やや少
	黄化病	□	△	△	□	△	—	並
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	少

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		H29	30	R1	2	3	発生期	発生量
ばれいしょ	疫病	△	△	△	△	△	並	やや少
	軟腐病	◎	◎	□	△	△	—	並
	黒あし病	◎	□	□	□	△	—	並
	そうか病	△	△	□	□	◎	—	やや多
	粉状そうか病	△	□	△	□	△	—	並
	アブラムシ類	△	△	△	△	△	早	やや多
てんさい	褐斑病	△	△	△	△	△	やや早	やや多
	根腐病(黒根病含)	△	△	△	△	△	—	並
	黄化病(旧 西部萎黄病)	(△)	△	△	△	△	—	並
	ヨトウガ(第1回)	△	△	△	◎	□	早	少
	ヨトウガ(第2回)	△	△	△	□	△	早	やや少
たまねぎ	白斑葉枯病	△	□	△	△	△	並	並
	軟腐病	□	◎	△	△	△	—	並
	乾腐病	△	△	△	△	△	—	並
	ハエ類(タネキハエ、タネハエ)	△	△	◎	◎	□	—	並
	ネギアザミウマ	△	△	◎	◎	□	早	やや多
	ネギハモグリバエ	(△)	△	△	△	△	早	やや少
だいこん	軟腐病	△	□	◎	□	△	—	やや多
	キスジトビハムシ	△	△	△	△	◎	—	やや多
あぶらな科 野菜 ^{注3)}	コナガ	△	△	△	△	□	やや早	やや多
	ヨトウガ	△	△	△	□	□	早	やや少
りんご	モニリア病	△	△	△	△	△	遅	少
	黒星病	◎	◎	◎	◎	△	やや早	並
	斑点落葉病	◎	◎	◎	□	△	並	並
	腐らん病	◎	◎	◎	◎	◎	—	多
	ハマキムシ類	△	△	△	□	◎	早	多
	モモンクイガ	△	△	△	△	△	早	やや少
	ハダニ類	△	△	◎	△	◎	早	やや多
	キンモンホソガ	△	△	△	□	□	早	並

令和4年度に多発が予想される病害虫

1. 水稻の紋枯病

紋枯病は高温多湿で多発しやすい。近年は本病の防除が実施されていないほ場が多く、発生ほ場では伝染源の密度が高まっている可能性がある。本年は夏季の気温が高いと予報されており注意が必要である。窒素肥料の多用を避けると共に、前年に発生が確認されたほ場では出穂前の薬剤散布を実施する。

2. 水稻のヒメトビウンカおよび縞葉枯病

ヒメトビウンカはイネ縞葉枯病を媒介し、ウイルス保毒虫率が高いほど、また、本種の発生量が多いほど、縞葉枯病の発生は多くなる。前年秋期の予察田畦畔すくい取りによる幼虫捕獲数は平年よりやや多く、越冬密度はやや高いものと推測される。本年は春季の気温が高いと予報されており、第1回成虫の発生はやや早いと予想される。また、一部地域では保毒虫率が高い地点も認められていることから、縞葉枯病常発地域においてはウンカ類に有効な箱施用剤を使用する。ウンカ類に有効な箱施用剤を使用できない場合は、移植後から6月上旬に水面施用剤または茎葉散布剤での防除を実施する。道外では、イミダクロプリド剤およびフィプロニル剤に抵抗性を持つヒメトビウンカ個体群が確認されている。道内でこれらの薬剤に対する抵抗性または感受性低下は確認されていないが、育苗箱施用および茎葉散布において防除効果が十分に得られなかった場合には、次年度は他の薬剤に変更することを検討する。

3. 水稻のアカヒゲホソミドリカスミカメ

アカヒゲホソミドリカスミカメは出穂期頃に成虫が畦畔から本田に侵入し、成虫および幼虫が穂を加害して斑点米被害を生じさせる。高温少雨条件では、本田への侵入、増殖、加害が活発になる。前年秋期の予察田畦畔すくい取りによる幼虫捕獲数は平年並であることから、越冬密度も平年並であると推測される。本年は暖候期（6～8月）の降水量は平年並、気温は高いと予報されているため、本田への侵入は早く、発生量および被害はやや多くなるものと予想される。薬剤防除にあたっては出穂期の基幹防除が重要であり、多発時は適切な散布間隔での追加防除が必要である。

4. 小麦の赤さび病

赤さび病は高温多照で多発しやすい。本年は4月の気温が平年より高いと予報されている。そのため、本病の発生に好適な条件となり初発時期が平年より早くなると予想される。また、5月および6月の気温は平年よりやや高いと予報されていることから発生量が多いと予想される。主要品種の「きたほなみ」は抵抗性“やや強”であるものの、近年多発生となる場合があるため「きたほなみ」においても注意が必要である。上位葉での発病後の防除では十分な効果が得られないため、多発が懸念される場合には、止葉抽出期までに薬剤散布を開始する。

5. 春まき小麦のムギキモグリバエ

ムギキモグリバエは、幼虫が小麦の茎内に侵入、加害する。生育初期の加害では無効分けつが増加し、出穂直前の加害では白穂や傷穂被害となる。また、出穂前の加害による出すくみ被害により有効穂数が減少するが、被害に気がつきにくく注意が必要である。春まき小麦では、は種が遅い程被害が大きくなりやすい。前年は本種の発生量は平年よりやや多く、秋季も高温に経過したため越冬密度は高いと推測される。本年4月の気温は高い、5月の気温はやや高いと予報されており、第1回成虫の発生はやや早いと予想される。春まき小麦では早期は種に努め、6葉期頃までに茎葉散布を実施する。高温経過により小麦の生育が早く進む場合、防除適期を逸さないよう注意する。

6. ばれいしょのそうか病

本病は塊茎形成期に地温が20℃以上と高く、少雨に経過すると多発する。本年は夏季が高温並雨と予報されており、注意が必要である。無病の種いもを使用するほか、種いも消毒を励行するとともにばれいしょの過作を避けることが重要である。

7. ばれいしょのアブラムシ類

6月上旬から8月下旬にかけて複数種が発生し、各種ウイルス病を媒介する。高温少雨で発生が多くなる。前年の発生量は平年よりやや少なく越冬量はやや少なかったと推測される。本年は暖候期（6～8月）の降水量は平年並、気温は高いと予報されているため、ほ場への飛来は早く、発生量はやや多いと予想される。原採種までは定植時に粒剤の播溝施用を行う。

60日から70日で残効が低下するため、その後は防除ガイドに準拠した薬剤散布を実施する。主要種であるジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモアカアブラムシ、ワタアブラムシはそれぞれ薬剤の効果が異なるので注意する。後半に発生が増加するワタアブラムシは下位葉に好んで寄生するので、薬液が十分にかかるよう散布を行う。

8. てんさいの褐斑病

本病は7～8月が高温多湿な年に発生が多くなる。本年は夏季が高温並雨と予報されていることから、本病の発生量は平年よりやや多くなると予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。また、チオファネートメチル剤、QoI剤、DMI剤およびカスガマイシン剤では道内広く耐性菌が発生しているため、薬剤の選択には注意する。薬剤散布にあたってはマンゼブ剤と銅剤を基幹とし、散布開始は初発期までに行う。薬剤の残効を考慮し適切な間隔で散布する（マンゼブ水和剤は14日以下、銅剤は7日以下）。耕種的対策（連作の回避、抵抗性“強”品種の導入）に積極的に取り組む。

9. たまねぎのネギアザミウマ

ネギアザミウマは、高温で早発・多発しやすく、少雨で多発が助長される。本種に対する薬剤防除は、適切な時期に開始すること、適切な防除間隔で効果の高い薬剤を使用することが重要である。本年は暖候期（6～8月）の降水量は平年並、気温は高いと予報されているため、発生量がやや多くなるものと予想される。たまねぎでは通常6月上旬以降に防除を開始するが、高温経過により初発期は平年より早いと予想されるため、適期に防除開始できるよう注意する。また、ピレスロイド剤抵抗性系統が道内の広い範囲で確認されており、他系統薬剤に関しても連用多用は避け、ローテーション防除を徹底する。

10. だいこんの軟腐病

本病は高温・多雨の条件により発生が助長される。本年は暖候期（6～8月）の気温は平年より高いと予報されている。降水量は平年並と予報されているものの、まとまった降雨があった場合には発生が多くなるおそれがある。このため特に夏どり栽培においては注意が必要である。抵抗性品種を栽培するとともに、窒素肥沃度の高いほ場では減肥し、適期収穫を心がける。感受性低下菌の発生している薬剤もあるため、薬剤の選択にも注意する。

11. ダイコンのキスジトビハムシ

成虫の産卵に好適な高温・少雨条件では次世代幼虫による地下部の被害が深刻化する。本種の前年の発生量はやや多かったことから、越冬密度はやや高いものと推測される。また、本年は暖候期（6～8月）の降水量は平年並、気温は高いと予報されているため、初夏まき以降の作型で密度が高まるおそれがある。多発時期には、は種時に粒剤を施用し、は種20-30日後からの茎葉散布を複数回実施する。

12. あぶらな科野菜のコナガ

コナガは道内では越冬が困難なため、春季に道外から長距離飛来する。本年5月の気温はやや高いと予報されているため、第1回の幼虫発生がやや早くなると予想される。また、暖候期（6～8月）の降水量は平年並、気温は高いと予報されているため、密度が高まるおそれがあり注意が必要である。近年ジアミド剤抵抗性系統の飛来が確認されており、本系統剤の使用にあたっては防除効果の確認に努める。また、いずれの系統の薬剤においても連用多用は避け、抵抗性が発達することのないようにローテーション防除を徹底する。

13. りんごの腐らん病

腐らん病は発病部位から病原菌の胞子が分散し、感染源となる。近年発生が多い状況が続いており、感染源の除去対策が十分でない園地もあると推察される。このような状況から本病の発生量は平年より多いと予想される。感染源を除去するために、発病部位を見つけ次第、削り取りや切り落としを行う。特に夏季になると発病部位が見つらなくなるため、早期から園地の観察に努める。削り取り等で出来た傷口が病原菌の侵入口となるため、薬剤を含んだ癒合剤を塗布する。また、休眠期防除も実施する。樹勢が弱ると感染しやすくなるため、樹勢を維持するために適切な栽培管理を行う。

14. りんごのハマキムシ類

前年は後志地方などでハマキムシ類の発生が目立った。発生が多かった園地では越冬密度も高まっていると推測され、越冬世代による春季の新芽や花叢の被害は大きくなると予想される。せん定時には、卵越冬種の卵塊削り落としを行い、幼虫越冬種活動開始前にせん定枝は園外へ搬出処分するなど耕種的防除に努める。また、本年4月の気温は高いと予報されており、りんごの生育や幼虫の加害開始が早まると予想されるため、防除適期を失しないようにする。開花期の防除はBT剤やIGR剤など訪花昆虫に影響が少ない薬剤を選択する。

15. りんごのハダニ類

前年は、後志および渡島地方などでハダニ類の発生が目立った。前年にリンゴハダニの発生が目立った地域、園地では、越冬卵密度が高まっている可能性が高いことから、休眠期のマシン油散布などによって越冬卵密度を低下させることが望ましい。本年4月の気温は高いと予報されているため、りんごの生育およびリンゴハダニの越冬卵ふ化時期が早まることが予想される。暖候期（6～8月）の降水量は平年並、気温は高いと予報されているため、夏季のハダニ類の密度は高まるものと予想される。ナミハダニでは多くの系統の薬剤に対し抵抗性または感受性低下が確認されているため、夏季の薬剤散布にあたっては、同一系統剤の使用を年1回にとどめたローテーション防除を徹底し、散布ムラのないよう丁寧に散布する。